

3—国 国 語

国 語

注 意

- 1 問題は **1** から **5** までで、15 ページにわたって印刷してあります。  
また、解答用紙は両面に印刷してあります。
- 2 検査時間は五〇分で、終わりは午前九時五〇分です。
- 3 声を出して読むではいけません。
- 4 答えは全て解答用紙に **H B** 又は **B** の鉛筆（シャープペンシルも可）を使って明確に記入し、**解答用紙だけを提出しなさい。**
- 5 答えは特別の指示のあるもののほかは、各問の **A・I・U・E** のうちから、最も適切なものをそれぞれ一つずつ選んで、その記号を書きなさい。また、答えに字数制限がある場合には、**、や** などでもそれぞれ一字と数えなさい。
- 6 答えを記述する問題については、解答用紙の決められた欄からはみ出さないように書きなさい。
- 7 答えを直すときは、きれいに消してから、消しくずを残さないようにして、新しい答えを書きなさい。
- 8 **受検番号**を解答用紙の決められた欄に書き、その数字の **○** の中を正確に塗りつぶしなさい。
- 9 解答用紙は、汚したり、折り曲げたりしてはいけません。



1

次の各文の――を付けた漢字の読みがなを書け。

- (1) 堆積した残土。
- (2) 版図を広げる。
- (3) 自己を卑下する。
- (4) コマ回しに興じる少年。
- (5) 一念発起して留学する。

2

次の各文の――を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- (1) 円高によるサエキ。
- (2) ドウに入った演技。
- (3) 思いあたるフシがある。
- (4) 彼にイチジツの長を認める。
- (5) キソウテンガイな方法。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。

中学二年の園田春菜は吹奏楽部でトランペットを吹いている。一年上の吉川恒太は、家が近く保育園も同じで、幼時には一緒にいるのが当然の存在だった。勇祐は恒太の一つ上の兄で野球の強豪校に進学している。

春菜が吹奏楽部に入部したのは、子どものころの憧れが大きなきっかけになっていた。

とはいえ、それは本当に昔のことだ。当時はまだ吹奏楽という部活があることも知らなかったのではないだろうか。春菜の通っていた小学校には吹奏楽クラブがなかった。中学では吹奏楽部に入ろうとなんとなく思い、そのまま入部してしまった。

それでも、自分たちが県大会に出場できたときは本当に嬉しかったのだ。

春菜自身、いつの間にか子どものころの憧れよりも、目の前の目標の方が大事になっている。県大会出場、そして突破。目指すは全国大会。それが今、自分がここにいる理由なのだ。

窓の外へ目を向ける。グラウンドに点々と散らばる生徒の姿が見える。陸上部、サッカー部。そして、グラウンドの隅の野球部に目が留まる。

人数が少ないためか、三階から見下ろすように眺めるとどうしても練習場がスカスカに見えた。

「おーい、みんな一度手を止めて集まってくれ。」

石川の声が音楽室に響く。音がやみ、楽器をその場に置いて全員が中央へ集まる。練習用に机を動かしているためにできた教室の真ん中のスペースにみんなが座り、石川を見た。

そんな部員をぐるりと見渡してから、石川が口を開く。

「みんなは秋のコンクールに向けて頑張ってると思うが、夏から秋にか

けてはいろんなイベントがあるな。文化部にとってはいろんなコンクールがある。それと同じように夏の運動部と言えば夏の大会だ。」

そう言った石川をつまらなそうに見つめ返す部員たちの中から、声がかかる。

「壮行会ってことですか？」

言ったのは三年生の先輩だ。あまり嬉しそうな顔ではない。春菜には、その理由もなんとなくわかるような気がした。

「流石に三年は察しがいいなあ。まあ毎年恒例のことではあるんだが、今年も吹奏楽部が入退場と、各部に送る激励の演奏をすることになる。」

石川の言葉を聞いて、二年生、三年生はあからさまに嫌そうな顔をする。

「そんなのに時間潰してる暇ないですよ。」

誰かが言った。

「まあ、そう言うなよ。他の部だって頑張ってるわけだし、一種の演奏の場だと思えばいいだろう？」

「そこでの演奏のために、全国大会の演奏の場を逃したら意味ないじゃないですか。」

すぐに切り返されて石川は困ったように首のうしろをかく。

<sup>(1)</sup>演奏の場。

確かにそう考えればやってみるのも意外と楽しいかもしれない。演奏をしている時、周囲の反応を見るのは嫌いではない。時々クラスメイトから「吹奏楽部が練習してるあの曲って何？」と聞かれると、不思議と嬉しかったりする。

「だいたい、他の部のために私たちだけが時間を潰されるなんて納得いきません。」

そう言ったのは部長だ。彼女の言葉に賛同するように全員がうなずく。

石川が小さく息をつく。それは、どこか苛いらついているように見えて、意外だなど春菜は思った。

石川は温厚おんこうで、よほどのことがない限り厳しく叱りつけるような怒り方は決してしない教師だ。もちろん苛立ちを生徒に見せることもない。

「いいか。確かにコンクールは大事だが君たちは中学生だ。部活自体が学校教育の一環として存在していることを忘れてないか。もちろん全部を新しい曲にする必要はないし、一年生の歓迎会や文化祭なんかで何度もやってるノリのいい曲を入れてもいい。俺おれもできるだけ負担にならない構成を考えるから。」

石川の言葉に、部員たちはまだ納得いかない様子だ。春菜は、そんな空気にどこかで気持ちが悪く落ちて行く感覚を覚えた。

そのまま、なんとなく気分が沈んだまま部活を終えて、春菜は帰りの道の土手をゆっくり歩いていった。

ぼんやりと空を仰ぎ見る。夕方の六時を過ぎているのに、まだわずかに橙色だいだいいろを残していた。気候はだいぶ暖かくなってきたけれど、やはり夕暮れ近くになるとほんの少し肌寒い。ゆっくり流れていく大きな風の塊かたまりを含んで、スカートが膨らんだ。

春菜はそれを押さえてふと、視界の隅に人影をとらえる。

少し広い河川敷かせんしきがある。だいぶ日が傾いているため、光の当たらない河川敷はほとんど黒い影にしか見えない。それでも、そのシルエットが誰であるのか春菜にはわかる。幼いころから見てきた影だ。

やがて人影がゆっくり土手の坂を上がって来る。上がり切る数メートル手前で、影(2)が気がついたように春菜を見た。

「恒ちゃん。」

「なんだ、春菜か。」

表情はよく見えないけれど、そういつて笑ったのがわかる。

恒太が土手を上り切るのを待って、二人で歩き出す。帰りが一緒にな

るのは珍しい。子どものころほど一緒に過ごすことは多くない。けれど、こうしてたまに顔を合わせれば普通に会話ができる距離きょりは変わらない。それになんとなくほっとする。

「もうすぐ夏だなあ。」

「そうだね。恒ちゃんまた黒くなっちゃうね。」

「言うなよ。多少は気にしてるんだから。」

おかしくて笑ってしまふ春菜を、恒太はじとりと睨にらみつけてから同じように笑う。

恒太の肌は決して元から色素が濃こい方ではない。子どものころの写真に写る恒太は春菜よりも色白だ。恒太の肌の色は、長年続けてきた練習での日焼けによるところが大きい。

春菜は、恒太を真面目だと思う。決して勇祐のように特別な才能に恵まれたわけではないが、同じように幼いころから野球が好きで、いつもひとりです自主トレをしていた。よく兄のあとをついていた恒太も、そのときだけは河川敷の橋の下や家から少し離れた空き地など、あまり人に見られないところを選んで、ひとりで練習をするのだ。努力を惜おしまないところも、そこを人に見せようとしないところも昔から変わらない。

春菜は、恒太のそんな頑張り屋な部分がすごいと思うし、羨うらやましくもある。

「ちょっと夏っぽくなって来たな。」

五月に入り日もだいぶ延びていた。空気は緑の香りかおを含み夏が近いと教えている。

「ちよっと気が早いけど。甲子園、楽しみだな。」

恒太が独り言のように呟つぶやく。ふっと一瞬、幼いころに見た情景が浮かぶ。

照りつける陽射しと、白い光と大きな声援せいえん。

今でもはつきりと覚えている。(3)それを消すように、数度瞬まばたきを繰り返

返した。

いつの間にか一歩分前に出ていた恒太が春菜を振り返る。

「なあ、春菜も楽しみだろ、甲子園。」

問われてドキリとする。鼓動がほんの少し早くなる。首筋を、足の隙間を流れていく風が冷たい。

春菜は、「うん、そうだね。」と答えて微笑んでみせる。

その口もとを上げてみせるが、上手く笑えていないような気がしてすぐに笑顔を引っ込めた。

「春菜の夢だもんな。甲子園でブラスバンドの演奏。」

恒太はやはり真面目だ。真面目で、ロマンチスト。きれいな目で見つめられるとドキリとする。それは色っぽいものではなくて、自分の中に隠している何かを見据えられているような、そんな感覚だ。

春菜は妙な居心地の悪さを感じて口を開く。

「恒ちゃんだって、本当に野球好きだよね。」

言いながら、歩く速度が早くなる。恒太より少し前になる。なんとなく、顔を見られたくないと思ってしまう。

「さっきだって自主練してたんでしょ？ 子どものころからずっと同じことを続けるってすごいことだよ。私にはきつと無理だもん。」

言うてから、自分の言葉に頷く。自分には無理。現に今だって、吹奏楽部にはいるけれど、野球の応援なんかよりコンクールの方がずっと大切だ。自分は、何一つとして曲げずに持っているものはないのかもしれない。

そう思った時、うしろで恒太が立ち止まる気配を感じて、春菜も足を止める。振り返ると、恒太が春菜を見つめていた。

その表情は、悲しみとともに、どこか怒りを含んでいるようにも見える。「俺は、別に自分がすごいなんて思わない。」

抑揚のない恒太の声は、心無しか普段よりも低い。それが、春菜を不

安にさせる。

「俺は、ただ好きだから自分のために続けてるだけだ。努力なんて自分で使う言葉じゃないけどさ、春菜は努力ってなんだと思ってる？」

恒太の言葉の意味をどうとればいいのかわからなかった。わからず、答えられない。

「春菜さ、努力って才能かなんかだと思ってる？」

風が吹く。鳥肌が立つ。肌寒い。恒太の目が、冷たい。

返す言葉が見つからず、恒太を見つめていた。やがて、恒太はゆつくりと歩き出し、春菜の横を通り過ぎて行く。それを見ることも呼び止めることも、追いかけることもできず、春菜はただ、立ちすくんでいた。どのくらいそうしていただろう。

もう、恒太は見えないところまで行ってしまっただろうか？

振り返りたい気持ちを抑えて考える。確認したいけれど、怖くてできなかった。

怖い？ 何が怖いのか？

自分に問う。

——「努力」って「才能」かなんかだと思ってる？

恒太の言葉が、頭の中で反復される。

その声に含まれた温度まで、リアルに再現してしまう。胸の奥が、ズクズクと鈍く痛んだ。

心地悪い。コレは何の痛みだろうか？

そう考えて、違ふと感じた。

心地悪いのではない。<sup>4</sup>多分コレは、後ろめたいのだ。

いつからか話題に出さないようにしていたそれを、突然掘り返されてごまかし切れなかった。今はコンクールが一番。その一言を、どうしても恒太には伝えることができないでいる。

(和泉実希「空までとどけ」による)

〔問1〕<sup>(1)</sup> 演奏の場とあるが、この言葉についての説明として最も適切なものは、次のうちではどれか。

- ア 先生と先輩のやり取りから、何のために演奏するのかと、音楽の本質的なあり方について目を向け始めたことを暗示する言葉。
- イ 先生と先輩が交わした会話を思い出すことで、険悪な雰囲気から無意識に離れたいと、自分の世界にひたる転換点となる言葉。
- ウ 先生の言葉によって、全国大会と壮行会のどちらの場の重要性も無視できないと、決めかねて迷っていることを象徴する言葉。
- エ 先生の発言を受けて、コンクールだけでなく聴衆に聞いてもらおう演奏にも意味があると、改めて認識するきっかけとなる言葉。

〔問2〕<sup>(2)</sup> 影が気がついたように春菜を見た。とあるが、この表現の意味の説明として最も適切なものは、次のうちではどれか。

- ア 春菜は学校で少し心が重くなる出来事があったけれど、親しい知り合いに会ってほっとしているということが、比喩を用いて強調されている。
- イ 春菜は影が誰なのかすぐに認識できたけれど、相手もすでに春菜だと認識しているということが、擬人法を用いて生き生きと表現されている。
- ウ 春菜は見慣れて自然に認識できるけれど、影は暗くて本来誰だか特定できない程度のものだということが、擬人法で効果的に表現されている。
- エ 春菜は相手が誰なのかはつきりわかっているけれど、これからの展開の予測はできないということが、比喩によって間接的に表現されている。

〔問3〕 それを消すように、数度瞬きを繰り返した。とあるが、その理由の説明として最も適切なものは、次のうちではどれか。

- ア 恒太の言葉でかつて憧れた高校野球の光景がありありと目に浮かんだが、今の自分には過去の思いだと、現実に戻って打ち消そうとしたから。
- イ 夏の強い陽射しと大きな歓声に対するかつての思いが鮮明に浮かんだが、今から考えると稚拙な憧れだったと、慌てて振り払おうとしたから。
- ウ 忘れていた幼い頃の思い出が現前するような確かな感覚にとらわれたが、すぐに色あせてしまうときめきなのだと、理性的に思い直したから。
- エ 恒太の眩きから高校野球への思いを共有していると疑っていない響きを感じたが、自分の心は変わったのだと、まだ知られなくなかったから。

〔問4〕 多分コレは、後ろめたいのだ。とあるが、「後ろめたい」気持ちには本文のどんなところに表れているか。これを次のように説明するとき、1と2に当てはまる表現を、1は十七字、2は十一字で、それぞれ本文中から抜き出して書け。

1 したり、2 たりするところ。

〔問5〕 本文の「風」の描写の説明として最も適切なものは、次のうちではどれか。

- ア 外の開放的な雰囲気を表しながら、人物の心情の比喩としても機能する、二重の表現意図が読み取れる。
- イ 季節の変わり目の微妙な変化を表すとともに、人物の心の動きと連動する、象徴的な意味が読み取れる。
- ウ 若者たちの物語にふさわしい、初夏の若々しくさわやかな雰囲気を、自然に醸し出す効果が読み取れる。
- エ 表面的主題と別に、はかない人間の思惑と悠久の自然を対比する、もう一つの隠れた主題が読み取れる。

〔問6〕 本文における「春菜」の思いの推移を順に表すものとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

- ア 不安感 ↓ 安堵感 ↓ 一時逃れ ↓ 罪悪感 ↓ 憂鬱
- イ 憂鬱 ↓ 不安感 ↓ 安堵感 ↓ 罪悪感 ↓ 一時逃れ
- ウ 不安感 ↓ 憂鬱 ↓ 安堵感 ↓ 一時逃れ ↓ 罪悪感
- エ 憂鬱 ↓ 安堵感 ↓ 一時逃れ ↓ 不安感 ↓ 罪悪感



次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。(＊印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。)

「書く」こと、「発信する」ことはもはや僕たちの日常の生活の一部だ。この四半世紀で、「読む」ことと「書く」ことのパワーバランスは大きく変化した。前世紀まで「読む」ことと「書く」ことでは前者が基礎で後者が応用だった。「読む」ことが当たり前の日常の行為で「書く」というのは非日常の特別な行為だった。しかし現代では多くの人にとって既にインターネットに文章を「書く」ことのほうが当たり前の日常になっている。そして(本などのまとまった文章を)「読む」ことのほうが特別な非日常になっている。これまで僕たちは「読む」ことの延長線上に「書く」ことを身につけてきた。しかし、これから社会に出る若い人々の多くはそうはならない。彼ら／彼女らの多くはおそらく「書く」ことに「読む」ことより慣れていない。現代の情報環境下に生きる人々は、読むことから書くことを覚えるのではなく、書くことから読むことを覚えるほうが自然なのだ。これは現代の人類が十分に「読む」訓練をしないままに、「書く」環境を手に入れてしまっていることを意味する。だが、かつてのように読むこと「から」書くというルートをたどることは、もはや難しい。それは僕たちの生きているこの世界の「流れ」に逆らうことなのだ。

ではどうするのか。現代において多くの人は日常的に、脊髄反射的に、たいした思慮も検証もなく「書いて」しまう。ならば「読む」ことと同時に「書く」ことを始めるしかない。いや、より正確には訓練の起点は「書く」ことになるはずだ。まずはプラットフォームの促す脊髄反射的な発信ではない良質な発信を動機づけ、その過程で「書く」ためには「読む」ことが必要であることを認識させる。そして「読む」訓練を経た上でもう一度「書く」ことへの挑戦を求める。「読む」ことではなく「書く」

ことを起点にした<sup>(2)</sup>往復運動を設計する必要があるのだ。

ではこの時代に求められているあたらしい「書く」「読む」力とは何か。たとえば能力は高くないけれど、なにか社会に物を申したいという気持ちだけは強い人がいまインターネットで発言しようとするとき、彼／彼女は問題そのものではなくタイムラインの潮目のほうを読んでしまおう。そしてYESかNOか、どちらに加担すべきかだけを判断してしまおう。

タイムラインの潮目を読むのは簡単だ。その問題そのもの、対象そのものに触れることもなく、多角的な検証も背景の調査も必要なくYESかNOかだけを判断すればよいのだから。しかし、具体的にその対象そのものを論じようとするとは話はまったく変わってくる。そこには対象を解体し、分析し、他の何かと関連付けて化学反応を起こす能力が必要となる。

そして価値のある情報発信とは、YESかNOかを述べるのではなく、こうしてその対象を「読む」ことで得られたものから、自分で問題を設定することだ。単にこれを叩く／褒めるのが評価経済的に自分に有利か、不利かを考えるのではなく、その対象の投げかけに答えることで、新しく問題を設定することだ。ある記事に出会ったときにその賛否どちらに、どれくらいの距離で加担するかを判断するのではなく、その記事から着想して自分の手であたらしく問いを設定し、世界に存在する視点を増やすことだ。既に存在している問題の、それも既に示されている選択肢(大抵の場合それは二者択一である)に答えを出すのではなく、あたらしい問いを生むことこそが、世界を豊かにする発信だ。

「書く」ことと「読む」ことを往復することの意味はここにある。単に「書く」ことだけを覚えてしまった人は、与えられた問いに答えることしかできない。しかし対象のある態度で「読み」、そこから得られたものを「書く」ことで人間はあたらしく問いを設定することができる。そうするこ

とで、世界の見え方を変えることができる。

あらたな問いを生む発信は、既に存在する価値への「共感」の外側にある。人々はインターネットである情報を与えられ、それに「共感」すると「いいね」する。このとき、その人の内面に変化は起きない。それがよいと予め思っていたからこそ「いいね」する。しかし問いを立てる発信は違う。国会を取り巻くデモ隊と、それを取り締まる機動隊のどちらに「共感」するかという回答を行う発信は世界を少しも変えはしない。しかしそこに人出を見込んでアンパン屋を出す人々の視点を導入することで、あらたな問いが生まれる。世界の見え方が変わるのだ。

こうした価値の転倒は、「共感」の「いいね」の外側にある。人間は「共感」したときではなくむしろ想像を超えたものに触れたときに価値転倒を起こす。そして世界の見え方が変わるのだ。

そして価値転倒をもたらすのは「報道」の役目ではない。僕がスロージャーナリズムのように「報道」に主眼をおかない理由がここにある。事実を報じることは前提として必要だ。しかしそれだけでは足りない。僕たちはその事実に対してどのように接するのか。その距離感と侵入角度を変えるための言葉が必要なのだ。そして様々な距離と角度から対象を眺め、接することではじめて人間はその事物に対しあたらしい問いを設定することができるのだ。そう、その行為に僕はいま改めて「批評」という言葉を充てたい。「報道」が伝えることができるのは、ある事実の一面だ。そして「批評」はその事実の一面と、自己との関係性を考える行為だ。距離感と進入角度を試行錯誤し続ける行為だ。「報道」は世界のどこかで生まれた「他人の物語」を伝える。報道を受信した人々はそれを解釈して「自分の物語」として再発信する。このとき与えられた問いにYESかNOか、0か1かを表明することだけでは世界は貧しくなる。このときあたらしく問いを立て直し「共感する／しない」という二者択一の外側に世界を広げるためには「批評」の言葉が必要なのだ。

「批評」とは自分以外の何かについての思考だ。それは小説や映画についてでも構わない。料理や家具についてでも構わない。それは、対象と自分との関係性を記述する行為だ。そこから生まれた思考で、世界の見え方を変える行為だ。最初から想定している結論を確認して、考えることを放棄して安心する行為ではなく、考えることそのものを楽しむ行為だ。ニュースサイトのコメント欄やソーシャルブックマークへの投稿で大喜利のように閉じた村の中でポイントを稼ぐことで満たされるのではなく、よく読み、よく考えること、ときに迷い袋小路に佇むことそのものを楽しむ行為だ。

誰かが批評を書くとき、書かなくとも批評に触れて世界への接し方が変わるとき、それは紛れもなく自分が発信する自分の物語の発露になる。しかしそれはあくまで自分についての言葉ではない。自分の物語でありながら自己幻想には直接結びつくことはない。何かについて書くこと(批評)は、自己幻想と自己の外側にある何か(世界)の関係性について言葉にすることだ。それは不可避に自己幻想の肥大するこの時代に、より必要とされる言葉なのだ。

(宇野常寛「遅いインターネット」による)

〔注〕プラットフォーム——個人が情報発信などを行う際に用いるSNSなどのこと。

タイムライン——インターネット上の投稿サイトなどにおいて、投稿者の発言が時系列に並んでいるもの。

僕がスロージャーナリズムのように「報道」に主眼をおかない

——情報の価値を十分に吟味し、掘り下げてから発信する  
スロージャーナリズムと同様に、筆者も単に事実を発信  
するだけの報道では足りないと考えているということ。

ソーシャルブックマーク

——インターネット上でお気に入りのウェブサイトが登録、公開されている場所。

大喜利——お題に従って参加者がひねりや洒落をきかせた回答を  
行いあうこと。

自己幻想——自分について自分が抱いている思い込み。

〔問1〕<sup>(1)</sup> この世界の「流れ」に逆らうことなのだ。とあるが、なぜか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア インターネットの普及により、現代では読む訓練をするための情報環境が失われてしまったから。

イ 現代の情報環境下では、読むことと書くことを区別せずに同時に学んでいくことが理想的だから。

ウ 書く環境が充実した結果、現代では書くことの延長線上に読むことを身につける道筋が一般的だから。

エ 読むことと書くことのパワーバランスの変化により、読むことが特殊な価値をもつ行為になったから。

〔問2〕<sup>(2)</sup> 往復運動とあるが、どういうことか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 脊髄反射的に書く習慣の上に、多量の文章を読むことを加えて、しだいに良く書くことができるように訓練すること。

イ 思ったままをすぐ書くのではなく、良質な発信を目指した読む経験を踏まえて、改めて書くように訓練すること。

ウ 読むことではなく、書くことを訓練の起点としていくことで、素早く情報発信ができるように習慣づけること。

エ 読むことと書くことを並行して訓練することで、両者を自由に行き来しながら、良質な発信が行えるよう習慣づけること。

〔問3〕<sup>(3)</sup> 「書く」ことと「読む」こととあるが、これについて次のように説明するとき、1と2に当てはまる最も適切な表現を、本文中から1は二十九字、2は三十字で探し、そのまま抜き出して書け。

現代に求められる新しい「読む」力とは、1力であり、また現代に求められる新しい「書く」力とは、2発信を可能にする力のことである。

〔問4〕<sup>(4)</sup> 「共感」の「いいね」の外側にある。とあるが、どういうことか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 以前からあった価値観の表明にすぎない、ある情報に対する賛同の意思表示とは、異なるということ。

イ 他人の意見に対して、自分の価値観に基づいた論評をするような発信とは、異なるということ。

ウ 他者の発信に対して、賛同の意思表示をするだけでなく、時には否定的な意見の発信をしていくこと。

エ 他者の意見に迎合するだけでなく、他者の意見をもとに、自分の利益となる発信をしていくこと。

〔問5〕 本文で対比されている「他人の物語」と「自分の物語」の違いについて、次の〔 〕のように説明するとき、〔 〕に当てはまる表現を、必ず本文中の語句を用いて、二十字以上二十五字以内で書け。

自己以外の何かについて、〔 〕がなされているかどうかという違い。

〔問6〕 この文章の構成、内容の説明として適切なものはどれとどれか。正しい組み合わせを、後のア～オの選択肢の中から一つ選べ。

- a 新しい情報発信のあり方という主要な論点について、言葉を変えながら繰り返し論じている。
- b 発信が日常となった現代の情報環境を中心にしつつ、時代を超えた普遍的主張に論が進んでいる。
- c 現代のSNSの状況を分析し、その問題点を指摘したうえで、若い人々に警鐘を鳴らしている。
- d 報道と批評を比較することで、対象との距離感を設定しにくいという批評の問題点を指摘している。
- e 論の序盤では、問いを投げかけることを重ねて論点を深めながら、段階的に論を進めている。
- f 異なる立場の主張にも触れながら、特定の立場に偏ることなく対比的に論を展開している。

ア aとb イ bとf ウ cとd エ aとe オ bとe

〔問7〕 現代の情報環境下に生きる私たちは、どのようなことに留意するべきだと考えるか。本文を踏まえ、あなたの考えを二〇〇字以内にとめて書け。なお、書き出しや改行の際の空欄や、や。や。やなどもそれぞれ字数に数えよ。

## 5

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。なお、本文の前では、松尾芭蕉が西行を慕い、その影響を受けていることが述べられている。

内は、本文に引用されている古文の現代語訳を補ったものである。（\*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

芭蕉がはじめから西行を究極的な場所に位置づけていたとはいえない。比較的早い時期では、貞享元年（一六八四）から翌年にかけて東海、伊勢、吉野、奈良、京都をめぐる『野ざらし紀行』の旅がなされているが、その中に次のように「西行」があらわれる。

外宮参拜のところで芭蕉が思い出している歌「また上もなき峯の松風」は、西行の『千載集』に入った一首

「深く入りて神路の奥をたづぬればまた上もなき峯の松風」

深く入りて神路山の奥を尋ねてみると、釈迦が教えを説いたこの上な  
い峰、霊鷲山の松のこずえを吹く風がここにも吹いているよ。

で、和歌の引用は西行への敬意である。神宮に近い西行谷で芋を洗う女たちの情景でも、吉野西行庵近くの湧水「とくとくの清水」でも、西行景慕の念は明らかである。しかしこれらはまだ西行を景物の中でとらえているとしか言えない。

貞享四年（一六八七）からの旅を記した紀行『笈の小文』にいたって、芭蕉にとっての西行は景物から切り離され、象徴的存在となる。実はそこでの西行は理念化されすぎていたかもしれないのだが、『笈の小文』の冒頭、芭蕉はおのれを風に破れやすいもの「風羅坊」と自己規定してから、次のように記した。

西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の絵における、利

体が茶における、其貫道する物は一なり。しかも風雅におけるもの、造化にしたがひて四時を友とす。見る処花にあらざるといふ事なし。おもふ所月にあらざるといふ事なし。像花にあらざる時は夷狄にひとし。心花にあらざる時は鳥獸に類す。夷狄を出で、鳥獸を離れて、造化にしたがひ、造化にかへれとなり。

和歌の道で西行のしたこと、連歌の道で宗祇のしたこと、絵画の道で雪舟のしたこと、茶の道で利休のしたこと、それぞれの携わった道は別々だが、その人々の芸道の根底を貫いているものは同一である。その上、風雅というものは、天地自然に則って、四季の移り変わりを友とするものである。見るものすべてが花であり、思うことすべてが月でないものはない。人は見るものが花のような優雅さを持たないならば、野蛮な人々と同様であり、心に思うところが花のような優雅さでないならば、鳥獸の類である。だから、野蛮な人々や、鳥獸のような境涯から抜け出て、天地自然に則り、天地自然に帰一せよというのである。

「風雅」とは、芭蕉によれば造化（自然）に随順することにはじまり、四時、すなわち春夏秋冬という「自然」の折々のあらわれを自分の「友」とすることによって醸し出されてゆくものである。しかし自然は即物的なものとして、外在としてそこにただ在るのではない。「風雅」の眼と心とをもって見、また思うのでなければならぬ。「見る処花にあらざるといふ事なし。おもふ所月にあらざるといふ事なし」なのだ。それが「造化にしたがひ、造化にかへ」ることにはかならない。人間は自然に随順し、最後は自然に帰着してゆくのである。

② 重要なのは、そこに逆説が介在していることである。人間はおのれを無たらしめて、自然の一部に化してゆくのだが、そのことを反面からみれば

ば、人間はおのれの眼と心のすべてをあげて自然を見出し、自然に帰する道をさぐり当てなければならぬ。おのれを自然の中で無化する事によって、風雅の最高最純の輝き、煌めきの一瞬を把握する事のでなければならぬ。おのれを「無」に帰することと「風雅」を実現すること——この二つのものの間に横たわる逆説に堪えられなければ「風雅」は成立しようがない。

この文学観——自己と「風雅」の対応でもあれば反・対応でもあるようなもの——を、芭蕉が直接に西行から得たというふうには言えないだろう。具体的な証拠などはなく、実証はできないからである。また、西行の和歌のどれがそういう文学観の具現となっていたのかということも、そう簡単には言えないようなところがある。そうであっただけ、『笈の小文』の西行言及は、理念的になりすぎていた観もなくはない。しかし芭蕉が「風雅」という詩の成立を、閃めきの一瞬をとらえることよってのみ可能であると考えていたのは明らかで、それは弟子服部土芳の『三冊子』の一節からもはっきり読み取れるものだが、こういふ瞬間的な機縁を重んずる思想の先人のひとり、和歌と「法」の一致を求め、「随縁随興」を説いた西行がいたことは否定しようがなかった。

芭蕉はここで「静」と「動」という観念を導入して語っている。宇宙の諸現象の変幻は動で、この動が「風雅」のたねとすれば、それを「見とめ聞きとめ」て「定着」の形で静止させなければならないのだ。この静止は動かない自然のようなものとは異なるが、それだけではなく、「静」の成就のためには一瞬の決定的な時というものがある。

「物の見えたるひかり、いまだ心に消えざる中に言ひとむべし」

対象の本質が光のように心にきらめいたら、その印象のまだ消えないうちに句作すべきだ。  
『三冊子』

光を見たその一瞬に事が成らないなら、それは駄目なのであり、消え失せるしかないのである。

芭蕉のこの教えの中に、明恵に語った西行の言葉が遠く交響しているように聞こえる。西行はものの「詩人」ではなく「心」の「詩人」だったといえるが、それだけにものと「心」の関係に思いをひそめた。即物的にも、が在るのではない、真言が成ってはいじめてものはものである——「華を読めども、実に華と思ふ事なく、月を詠ずれども、実に月と思はず、只此の如くして縁に随ひ興に随ひ読み置く処なり」

歌は、現実の花や月をきっかけにして詠むのではあるが、歌の言葉はあくまでも概念であって、実体としての花や月のことではない。言語世界は実物世界から独立しているのだから、このことを心得て、心を自由にして詠むのがよいのだ。  
『明恵上人伝記』

縁と興にしたがって詠めば、花ならぬ花も花となり、月ならぬ月も月となるという補助線を引いてみる事がここで許されるだろう。こう考えると虚実の反転という逆説性を媒介にした西行の歌論は、『笈の小文』や『三冊子』からうかがい知りうる芭蕉の俳諧論——静と動の融合一致、瞬間の重視、光への志向——に呼びかけている。

(高橋英夫「西行」による)

〔注〕伊勢——旧国名。現在の三重県の大平に相当する。

吉野——奈良県南部の地名。

『野ざらし紀行』——芭蕉の書いた作品。『笈の小文』も同じ。

外宮——伊勢神宮を構成する社の一つ。

『千載集』——平安時代末期の『千載和歌集』のこと。

神路山——三重県伊勢市にある伊勢神宮南方の山。

釈迦——仏教の開祖。

西行庵——西行の仮住まい。

景慕——仰慕のこと。

宗祇・雪舟・利休——芭蕉以前の著名な風雅人。連歌の宗祇、墨

絵の雪舟、茶の湯の利休。

把捉する——しつかりとつかまえること。

服部土芳——江戸時代の俳人。芭蕉の弟子。『三冊子』は服部土

芳の俳諧論書。

法——仏教の教え。

随縁随興——出会いと興趣に従って歌を詠むこと。

明恵——鎌倉時代の僧。『明恵上人伝記』は明恵の言行をつづつ

た本。

真言が成ってはじめてものはものである

——言葉で本質をとらえることによって、ものは意味をもつ

ということ。

俳諧——芭蕉がつくる俳句などのこと。

〔問1〕<sup>(1)</sup>造化にしたがひて四時を友とす。とあるが、筆者はどのように解釈しているか。次のうちから最も適切なものを選べ。

A 芭蕉のいう風雅とは、自然に従い、四季を友として生み出されるもの  
だということ。

イ 芭蕉のいう風雅とは、四季の流れに随順し、季節にあう句を詠むもの  
だということ。

ウ 芭蕉のいう風雅とは、自然の真髓を自身で見定めることで、生まれる  
ものだということ。

エ 芭蕉のいう風雅とは、自然の風物そのものに即して、素直な句を詠む  
ものだということ。

〔問2〕<sup>(2)</sup> 重要なのは、そこに逆説が介在していることである。とあるが、

どういうことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

A おのれの眼と心のすべてをあげて自然を見出すことが大切であるの  
に、同時に見たままの写実的な表現をしなければならぬということ。

イ 自分の感覚と感性にもとづいて自然の美を見出しながらも、自分自身  
を無にすることで、作品として定着させなければならないということ。

ウ 自分が感じたままの素直な気持ちを選んでは使わねばならないということ。  
感動させるような至高の言葉を選んで使わねばならないということ。

エ 実際には美しい風景などそれほど多くは実在していないのに、自然の  
美という理念の確立のために、多くの詩を詠まねばならないということ。



〔問3〕<sup>(3)</sup> 瞬間的な機縁を重んずる思想とあるが、どういふことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 美しい言葉で読者を感動させた一瞬にしか詩は成立しない、と芭蕉は考えていたということ。

イ 変動する諸現象を統一した一瞬でなければ詩は成立しない、と芭蕉は考えていたということ。

ウ 句と信仰が一致した一瞬でなければ詩は成立しない、と芭蕉は考えていたということ。

エ 決定的な一瞬を捉えることでは詩は成立しない、と芭蕉は考えていたということ。

〔問4〕<sup>(4)</sup> 補助線を引いてみるとあるが、どういふことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 明恵上人の考えを理解する上で、自然との出会いによる感動を即興で句にし、記憶に留めることが大切だという、土芳に語った芭蕉の言葉が参考になるということ。

イ 芭蕉の考えを理解する上で、縁と興に即して概念化すれば、どんなものでも趣のあるものとなりえるという、明恵に語った西行の言葉が参考になるということ。

ウ 芭蕉の考えを理解する上で、信仰心に基づく人や自然との出会いによって、良い句は生まれてくるという、土芳に語った芭蕉の言葉が参考になるということ。

エ 明恵上人の考えを理解する上で、風雅に必要なものは、詩歌の中に伝統を詠み込むことであるという、明恵に語った西行の言葉が参考になるということ。

〔問5〕 本文の内容に合致するものとして、次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 『笈の小文』に見られる芭蕉の文学観は、直接西行から得たとは言いが切れないものの、先行者として西行の影響を受けている。

イ 『野ざらし紀行』に見られる芭蕉の理念は、芸道の根底を貫くものを追求した、西行への敬愛の念によって生み出されている。

ウ 『三冊子』に見られる土芳の文学観は、「静」と「動」といふ観念によって、宇宙の諸現象を静止・定着させるといふことである。

エ 『明恵上人伝記』に見られる西行の理念は、芸術的真理を追求しつつ、人を思いやる心を持って和歌を完成するといふことである。

